

いのち 毎日新しい

東日本大震災以降、日本人の多くが「いのち」について考えたこととでしょう。

この三月十一日には、一周年の追悼の式典が開かれ、総理大臣等のお偉い方々が、「震災で亡くなられた方々の犠牲を無駄にしないためにも、人命を守るための防災設備に力を入れる」旨を表明されています。

確かに防災によつて、人命を守ることも大切なことではありますが、これだけでは寂しい気がします。

今の日本にあつては、どうも「いのち」は在つて当たり前と思つている人が多いようです。

親鸞聖人の晩年に、日本全国を大飢饉と疫病が襲い、庶民から貴族に及ぶまで、大変に多くの人々が亡くなるという災害がありました。

この出来事について聖人は、現代語にすれば、「何をおいても、去年今年と老若男女を問わず、多くの人が亡くなられたことは、本当に哀れなことです。ただし、何時どうなるか分からない命であるということとは、御釈迦様がとつくに詳しくお説き下さつてのことですから、決して驚くことではありません。」とお弟子の一人に御手

紙を出されています。

私たちは、多くの人が亡くなる事件が起こるたびに、なぜこんなことが起こるのだ、なぜこれだけ多くの人々の命が奪われるのだ、と驚いてばかりいますが、聖人は「哀れなことではあるが、驚くことではない」とおっしゃられています。

つまり、私たちの「いのち」は無くても当たり前であつて、今「いのち」在ることが驚きなのだとということです。

在るはずのない「いのち」が、今在るといふ驚き。私たち一人ひとりの「いのち」は、日々の、一息一息の、一瞬一瞬の新しいものであり、尊く大切なものであると知れます。

いのち毎日新しい

